

F-SOAIPとは、多職種協働によるミクロ・メゾ・マクロレベルの実践過程において、生活モデルの視点から、当事者ニーズや観察、支援の根拠、働きかけと当事者の反応等を「F（タイトル）」「S（利用者等の言葉）」「O（観察・多職種情報等）」「A（考えたこと）」「I（対応したこと）」「P（予定）」の項目で可視化し、PDCAサイクルに多面的効果を生むリフレクティブな経過記録の方法。

前回に引き続き、岡山市の地域包括支援センターでのF-SOAIP活用実践報告を紹介します。多職種による支援経過の共有、業務の効率化をICT化と両立させながら実現。地域包括システムのさらなる深化に向けての研修強化など次のステップに歩を進めています。

## F-SOAIP導入による記録手法の効率化と今後の展望

岡山市南区南地域包括支援センター センター長 総センター長補佐 山本 恵美子  
岡山市北区中央地域包括支援センター センター長 藤本 美枝

### はじめに

地域包括支援センター（以下、包括）は、高齢者を中心とした地域住民が住み慣れた地域で安心して暮らし続けるための支援を提供する重要な役割を担っている。業務として個別相談や福祉サービスの提供、介護予防支援等、多岐に渡るが、それらの情報を的確に把握し共有することも重要な役割として求められている。「記録」は業務の中で非常に重要であるが、そのために多くの時間を費やしている現状があり、岡山市包括は、職員間での記録方法が統一されていなかったこともあり、的確な情報の把握がしにくいといった課題が生じていた。しかし、F-SOAIPという新たな記録手法の導入により記録作業の迅速化や情報共有の強化といった業務の効率化が図れるようになった。このことにより、F-SOAIP導入の成果と今後の展望についてまとめた。

### F-SOAIP活用の意義と現状

岡山市包括が設置された当時は、記録方法（手法）には特に決められたものはなく、職種ごとで違いがあり、統

一感に欠けていた。特に、異なる職種からの指導的意見を避けるために、「見聞きした情報を全て記録することが良い」といった考えを持つ職員も多かった。ある時、「急いで記録を要約して見せてほしい」と関連事業所より依頼があったことがあったが、いざ確認してみるとその記録は数ページに渡る膨大な文章量で、なおかつ情報の抜けや漏れが生じていて要約する作業に相当な時間を要したといった苦い体験談がある。

そんな中、当時の総センター長よりF-SOAIPの導入の発信があり、同時に包括の記録ソフトシステム（以下、ソフト）の更新時期と重なったこともあって、どちらも今後進化していくICT化を見据えた導入であることを研修の中で、少しずつ職員が理解していった。導入当初は、カテゴリごとに情報を振り分けることに苦心したが、時間と共に次第に慣れ、業務全体にわたって効率化が図れるようになった。また新ソフトになったことで、旧ソフトでは実現できなかった記録内のワード検索が可能となったことや、これまで手作業で行っていた業務統計作業がある程度自動化されるようになった。F-SOAIPとソフトとの親和

性が高かったことも、更にF-SOAIPの活用につながったと感じている。

F-SOAIPは地域包括支援センターが提供する支援活動において、情報の集約・分析・共有を支援するツールとして重要な役割を果たしている。高齢者やその家族のニーズを的確に把握し、適切な支援を迅速に行うためには、膨大な情報を整理し、効果的に活用することが不可欠である。F-SOAIPを活用することで、業務の効率化が期待できる一方、職員がICTに精通するためにも定期的なスキルアップも必要である。

### 職員のスキルアップ・継続的な支援

岡山市包括では新任職員へチームの先輩やプリセプターからOJT方式で支援経過記入方法の指導を行っている。既存の記録の読み込みを行い、とにかくF-SOAIPを「使ってみる!」「慣れる!」ことで、記録方法を習得している。この反復的な学びのプロセスがF-SOAIPの実践的な活用につながっていると感じている（図1）。

一方で、F-SOAIPの導入から5年が経過した今、全職員が一定のレベルに達しているかと言えば、そうとは言い